
聖女物語～～～世界編～～～

キンカラキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖女物語～～～世界編～～～

【Zコード】

N7315M

【作者名】

キンカラキ

【あらすじ】

人生に絶望した高校一年生、神奈千春、ある時彼女は、人類救済projectというサイトを発見する。

いかにも怪しいサイトであつたが、自暴自棄になっている千春は、適正検査を受けてしまう。

そして、適正ありと診断された時、彼女は自分の人生のすべてをかけるほどの重大な選択をせまられる。

序章（前書き）

すいません前書きが長いです。超長いです。興味がない方は飛ばしてしまつてください。

ただ、もしも序章を読んで少しでも興味をもたれた方、この前書きに聖文物語の大まかな概要、そしてテーマが書かれているのでよろしくお願ひします m (——) m

（ていうか、あとがきに書けばよかつたような気が . . .? . . .）

（ここにちは、キンカラキと申します。

小説家になろうのユーダーの方々、そうでない方々もこの小説に立ち寄つていただいてどうもありがとうございます m (——) m 素人が書いた稚拙な文章であります、皆様の心に少しでも印象に残つていただければ幸いです。

さて、これから連載させていただきます聖文物語ですが、序章を読んでいただくとわかると思うのですが、結構残酷な描写が含まれていることが多いです。

物語の性質上どうしても仕方のないものになつてしましました。最初は学園物のほのぼの超能力バトルを描こうと思つていたのですが、どうにも設定の段階で話が壮大になつてしまつたので、ほのぼのの項目は脳内消去させていただきました。

さて、序章でも書かれているのですが、登場人物が使つている能力は超能力でも魔法でもありません。

この辺は物語の重要な伏線なので、詳しくは書くことが出来ませんが、ほかに表現するタグがなかつたのでやむなく超能力のタグをつけさせていただきました。

バトル物で残酷な表現が多い、物語を読んでいると、いつたいどの辺りが聖文物語なんだ？って思う方もいるかと思いますが、最初から聖女な主人公なんてありえない。

最初から聖人君主な人間なんて不気味なだけだと思いました。

この物語に登場する人物のほとんどは暗い過去、人間くさい悩みを抱えています。それは他人にとつてはたいしたことなくとも、当人にとってはまさに人生に立ちふさがった大きな壁であり、また限りなく深い溝でもあるのです。

この作品のテーマは2つあります。

1つは人生の選択。

あの時にあの選択をしていれば今頃は別的人生を歩んでいたはずだ。

なぜあの時ためらつてしまつたのだろう。

もつとあの時頑張つていれば . . .

そんな過去が読者の皆様にもあると思います。

ですが、それでも、自分が選んできた道だから、そう言い聞かせてここまで的人生を歩んでこられたと思いますし、これからもそうであると思います。（もちろん自分もです）

さて、この人生の選択は言うまでもなくそれそのものが人生であり、くつがえすことの出来ないものです。

ですが、あの時の自分にとつては深く考えることなく、些細なものであつても、今思えば、重大なことであり、深く後悔をしている方も多いと思います。

それはたとえ、軽いすれ違いであつたり、軽い親切であつたりとか、ですが、それがきっかけで何が起ころのかはわかりません。

もちろん、何も起こらないことが圧倒的に多いでしょう、ですが、そのほぼ、すべてのことには自分以外の誰かが関わっていると思います。

人は他人によつて縛られ、他人もまた、自分を含む誰かによつて縛られています。

他人を傷つければ、自分も一緒に傷がつく、それは、大切な人であればなおさらのことだと思います。

この話はそんな軽いすれ違いが起こしてしまつた。悲しくも優し

い物語なのです。

2つ目のテーマは人間の弱さです

さて、序章を読んでいただくとわかると思うのですが、いきなり2人の殺し合いから物語ははじまっています。

しかも片方は最初は逃げているだけで、殺意などはありませんでした。

ですが、絶体絶命の危機になると自分が助かるために、容赦なく殺そうとしています。

人が人を殺してはいけない、これはある、特定の時代背景時以外は、人間社会では当然のように定められたルールであります。なぜ殺してはいけないか？そう問われると刑罰をうける以外の具体的な理由を説明できないかもしません。

ですがそれをなしにしても、人殺しはいけない、ほぼすべての方がそう考えていると思います。

ですが人間とは弱いもの、そんな論理など、生命の危機、自我の危機の前には吹き飛んってしまうことがあります。

最初に殺そうとしている少女にも実は狂人になってしまったそれ相応の理由があります。（詳しくは後ほど本編で）

ただ、それは仕方がなかつたとはいえ、やはり自己の弱さからきてしまつたものなのです。

そしてその心の弱さは、たいていの場合が自分を守るために発揮される（つていえばいいのかな？）物と思います。

自分よりも他人を取ることが出来る人なんてめつたにいないと思います。

かといって、仮にそれが出来たとしても、それが心の強い人、そうであるとはいえないとも思います。

本当の強さとは？そして、生きるといつことの真理とは？それが聖女物語の大筋のテーマなのです。

最後に主人公である神奈千春は、決して思いやりにあふれて、他人のために動く、そんな主人公体质ではありません。どちらかというと、自己保身が強く、また、思考も幼い、さらに相当のネガティブな人間です。

ぶつちやけ主人公失格です（爆）

しかしながら欠点だらけの主人公が悩みに悩んで、時には間違いを犯しながらも、ある、ひとつ到達点にたどり着く。

聖女物語とはそんな物語なのであります。

この悲しく辛くそして苦しい、でも、どこか優しさのある聖女物語をどうかよろしくお願ひします m（——）m

最後にこんなにも長つたらしに前書きを呼んでいただいてどうもありがとうございました m（——）m

第一巻 日常と非日常の狭間の中で

序章

風の強い夜だった。

11月の半ばの夜は寒い。しかも強い風が吹いているとあれば、誰もが好き好んで外を出歩きたがらないだろう。そしてそれは、平穏に暮らしている人々にとつては幸運なことだったに違いない。

「ハア、ハア、ハア」

私はかつてない恐怖を感じながら夜の住宅街を走っていた。

息が切れる、苦しい、かつてこれほど真剣に走ったことがあっただろうか？いや、ない。私の人生では初めてのことだ、というか、何者かに追われる経験も初めてのことだ。

そう、今私は追われていた。誰に？わからない、初めて会ったわけではないが、顔を見たことがある。その程度の面識でしかない。それなのに追われている。いや追われているんじゃない。

命を狙われているのだ。

「どうしてこんなことに」

私は絶望を感じながらつぶやいた。

助けを求めて叫びながら逃げていてるのに誰一人として現れる気配がない。それも当然か。私は自動車並みの速度で走っているのだ、もしも仮に私の叫び声に気づいて駆けつけたところで私はとっくに見えないとこままで進んでいるだろう。だが、それでも走りをやめることは出来ない。追いつかれたら殺されてしまう。あの異常者に。

むしろ誰も来ないほうが幸運なのかもしれない。誰かが駆けつけてくればあの異常者はためらいなく殺すだろう。何とか逃げ切るしかない。

私はかすかな希望を胸に逃げ回っていた。でも、ここがどこなのか、まったくわからない。

かなりの時間走り回っていたせいか、まったく土地勘のない場所に迷い込んでしまった。たぶんここは私の住んでいた町ではないだろう。もしかしたら市を越えてしまっているかも知れない。それにこここの住宅街はまるで迷路のようだ。同じような風景ばかりでなかなか抜け出すことが出来ない。

私は不意に足を止めた。いや、止めざるを得なかつた。

「行き止まり！」

周りは塀に囲まれていた。前にも横にも通り抜けられるといひがなさそうだった

「何で、こんな迷路みたいな道を作るのよ、ここに車が迷い込んだらどうするつもりなの」

私は精一杯の声で毒づいた、もはや頭が正常に機能していない。頭の中がパニックになつていて。

「あはあ、みい～つけたあ～」

不意に後ろからうれしそうな声が聞こえてきた。その声はまるでねずみを追い詰めた猫のようなイメージを私に与えた。全身が逆立ち、震えを抑えることができない、追い詰められたねずみはこんな心境なんだろう。

まつたく体が動かない、声を上げたいのに口がパクパクするだけだ。頭の中も真っ白だ。

シユゴ

幾度となく聞いた音がした。もう一度と聞きたくない音が。

「うああああ

私はようやく声を出すことが出来た、といつてもこれは悲鳴ではない、痛みに耐えかねて全身から榨り出すような叫び声だ。

そう、あの音とともに私の体には風穴を開けられていた。今度はいつたいどこを開けられたのかわからないくらいパニックに陥っている。

私は痛みのあまり地面に転がりこみ、ようやく相手のいる方向を見ることが出来た。

先ほどからずっと私を追いかけってきた相手は中学生ほどの少女だつた。綺麗でまっすぐな亞麻色の髪は肩までかかる程度、少々病弱そうに見えるが小さな顔で整った顔をしている、そしてなぜか病院の入院患者が着る服を着ていた。服はともかくここまでみれば可愛い印象を与えるのだろうが、血まみれの病院服と、狂気が宿った、としか言いようのない異常なまでに見開いたまぶたが、可愛いという印象を吹き飛ばし、怖いという印象を与えていた。

「追いかけっこも飽きちゃったから、足を射抜いたよお」

足？足を射抜かれたのか？ようやく私はこの激痛が足からきていることに理解をした。同時に私はもう先ほどまでのように逃げ回ることが出来ないことも。

「あは、あははは、あはははははははははははは。痛い？痛い？ねえ？痛いのあ～？」

狂気に満ちた顔で笑っている。狂人、といつよりも人間とは思えない。

シユゴ

「あああああ

あまりの痛みに私は再び叫び声を上げた。今度は逆の足を射抜かれた。

いつたい目の前の少女が何をしているのか？どんな凶器を使っているのか？最初はわからなかつた。だがこうして対峙して攻撃を受けてみてようやくわかつた。

風だ。風を束ねて光線のようにして打ち出しているのだ。

人体を貫通するほどの風、いつたいどれほどの圧力で打ち出しているのか？

「あはははははあ～、これでもうあなたは逃げることが出来ないわねえ～。さあ、遊びましょうよお～。きやあはははははあ」

シユゴ、シユゴ、シユゴ

「いやあああああ

風の光線が再び私の体を貫いた。

もう限界だ、私はこのまま死んでしまうのだろうか？こんな時漫画やアニメであればどこからかかっこいいイケメンが助けに来てくれるものなのだが、現実と空想は違う。どれだけ叫んでも誰も助けてくれない。

「どれだけ叫んでもむだよお～、あなたの貧弱な叫び声なんて私の風で吹き飛ばしてあげるんだからねえええ～」

絶望的な言葉をかけられた。せめて私の死ぬ物狂いの叫び声を聞いて誰かが駆けつけてくれるか警察を呼んでくれるかもしけない、そう思っていたのに。

私、このまま死んでしまうのかな？死んだら誰か泣いてくれるのかな？嫌だよ、まだ死にたくない、死にたくない、死にたくないよお。

「何をやつてんのよお、あんたも戦いなさいよお、あんたも能力を持つてるんでしょお～」

能力？確かにある、これまで生きてきて、そんなものは空想の世界だけで現実にあるわけがないことを知っていた。だが、目の前の少女は確かに現実ではありえない不思議な力を使っている。現実世界でからうじて通用する不思議な力といえば超能力だろう。しかしこの力は超能力とは思えない、どちらかというと魔法に近いような気がする、だが、魔法でもない。超能力とも魔法ともつかないこの不思議な力は確かに私にも宿っている。だが、こんな力で今の危機を脱出できるとは思えない。それに、私に宿ったのは能力だけではない。

人間本当に命の危機になると意外と冷静になるようだ、目の前の危機に対してもうすれば助かるのだろうか、今までの人生で發揮し

たことがないほどの集中力で頭がフル回転していた。

ショコ、ショコ

再び私の体を風の光線が貫いた。もう、私の体は穴だらけになつているとおもう。貫いた先から空氣摩擦で傷口を焼いてしまうので出血がない。だから私は今まで生きていたのだ。そうでなかつたらとつくに私は出血多量で死んでいだらう。

この耐え難い痛みを何とか押し殺し、私は地面に倒れこみ動かなかつた。

「あれれえ～、もしかして死んじゃつたの～？それとも氣絶をしちやつたのかなあ～？」

近づいてくる気配がする、そうだ、こっちは来い、逃げることが出来ない以上、私の手の届くところにきてくれない限り私は勝ち目はない、ベタなおびき寄せの方法だがこれ以上の方法が思い浮かばなかつた。

「だめよお～氣絶なんてしちゃあ～、あなたはもつともつと私と遊ぶんだからあ～」

私の目の前まで来て私の頭を蹴飛ばした。いまだ私は死ぬ物狂いの力で起き上がり、目の前の少女を突き飛ばした。少女は思ったよりもずっと軽かつた、そして私の予想をはるかに超えて遠くへと吹き飛んでいった。

まずい、思つたよりも遠くに離れてしまつた。せつかく手に届く間合いで近づいてきてくれたのに、私は、再び死ぬ物狂いの力で飛んでいった少女の下へと走つた。

もはや足の痛みなどにかまつている余裕はなかつた、とにかく死にたくない一心で少女の下へと急いだ。そして少女の下にたどり着くと仰向けに倒れている少女の上に座り馬乗りの形になつた。

少女は混乱しているようでもまだ自分の状況を理解していないようだ。今のうちにやるしかない。そう、殴り殺すのだ。今の私なら人間の体など簡単にこわすことが出来るだらう。私は覚悟を決めた。次の瞬間。

理解が出来なかつた。一体何が起こつた？私は助かるかもしねない。そう思つて渾身の力で拳を振り下ろし、少女を絶命させたは�다。それなのになぜ、少女は無事で私は丁字路のところまで吹き飛んでいるのだ。

いや、わかつてゐるはづだ、ただ、理解したくないだけで、そう、私は拳を振り下ろした瞬間に少女の起こした爆風に後ろから吹き飛ばされたのだ。しかも、この角度ならば本来は前のめりになるはずなのに、それすら許さないほどの圧倒的な風圧で。

私は理解をした。もう私に助かる道はないのだということに。

少女はいかにもがつかりしたような顔で私を見て、こうつた

「つまらない奴、 死ね」

それが私の聞いた最後の言葉となつた。

序章の前日

第一話 序章の前日

ジリリリリリリリリ

目覚まし時計が、朝の訪れを告げた。私は半覚醒状態でベルを止める。

「まだ眠いなあ」

私はため息をついた。

本気でもう一度眠つてしまおうかと強い誘惑にかられたが、学校を無断で休むとまた面倒になるので、仕方なく準備を始めた。歯磨きをして、顔を洗い、制服に着替える。最後に眼鏡をかけて、ひと通り準備が終わり部屋から出て行くときに思わずつぶやいた。

「また今日も一日が始まってしまうのかあ」

はあー、ともう一度ため息をついた。

部屋を出てしばらく歩いていると、もうすっかりと冷たくなった空気が私の体を震わせた。学校まで徒歩で20分ほどだが、近づいてくるにつれて自分の足が重くなつてゆくのを感じていた。

一人でとぼとぼと歩いていると後ろから私に向かつて、かけてくる少女がいた。

「おはよー、神奈」

「あつおはよう、石原」

神奈千春、私の名前だ。

そして今私に声をかけてきた少女が石原陽^{いはらよう}。私の数少ない友人と呼べる存在だつた。

千春は出来る限りの愛想で振り向いて答えた。

「今日は寒いね、神奈」

「もう11月半ばだからね」

「今日の2時間目体育なのになあ～」

たわいのない話をしながら学校までの道のりを歩いていった。

千春は石原のことが友達だと思っているが、正直あまり好きではなかつた。もちろん、嫌いではないのだが、千春の本当の心を話せるとは思えなかつた。千春には石原にも、クラスメイトにもいえない秘密があつた。

それは、自分がアニメ好きでゲーム好きなのだと云つた。別に後ろめたいことではないはずなのだが、どうにも世間はそういつたことに冷たい感じがする。事実、何らかの犯罪があると、人の家には無数のゲームが、とか無数の漫画が、とかそんなニュースが報道されるイメージが沸くのだ。

実際はそんなこと言つてこるコースなど、千春は見たことがないのだが、世間のイメージがすでにやうなつてしまつていて、千春は感じていた。

世間は、アニメやゲームに冷たいのだ。

千春はそう感じていたため、私はアニメやゲームが大好きな女の子なんですが、言つことができなかつた。だから、もちろん友達の石原もクラスメイトも千春の本当の趣味を知らない。よつて結局、石原の話にあわせるしかないのだ。

石原の話はつまらないわけではないが、本当の話が出来たらどんなに楽しいことだらうと思つ。しかし、千春にはもう、そのことを絶対に言わないと心に決めていた。

あんなことはもう繰り返したくないからだ。

「聞いてる？ 神奈」

千春ははつとして答えた

「えつーああ、『めん』『めん』

「どうしたの、ボーッとしちゃつて」

知らないうちに、心が過去にとかのぼつていたらしく。やつ、千

春のトラウマに。

「い、いやいや、なんでもないから」「まさか、恋！」

「いやいや、全然違うよ、何を言つてこのの」

手をブンブン振りながら答える。

「その反応、あやしい～」

石原はニヤニヤしながら返してきた。

「本当に違うよ～」

本当に全然違うことなのに、ますます、あせりだした感情が石原を悪ノリさせた。

「あ～あ～、どっかそのへんに彼氏、転がつていなかな～」「ロロロロ転がっている彼氏なんてまっぴらごめんなのだが。

「彼氏、ねえ～」

千春は重い気持ちで答えた。そうしている間に、千春の学校、清水ヶ丘高校にたどり着いていた。

「起立、礼、着席」

一時間目は古典、やばい、いきなり眠くなりそうな授業だ。眠い気持ちを抑えながら、黒板に書かれた文章を必死で書き写す。

古典なんて、社会に出たらなんの役に立つんだろう。そんなことを考えながら、あくびをかみ殺した。きっと、クラスメイトのほとんどもそう思つてゐるに違ひない。実際、何人かも眠たそうな顔をしていた。

結局みんな真剣なのは、テストで悪い点数を取らないためなのだ。まだ1年生だから、それほど、進路のことを考えたことはないが、授業の内容よりも、テストの点数が将来の役に立つなんてなんだかおかしな感じだなつて千春は考えた。

2時間目は体育だ。しかも、外で陸上だ。

「この寒いのにね～」

石原は文句を言つていたが、千春は陸上で助かつたと思っていた。

運動オノチの千春は集団競技が苦手だった。

どうせ、私のせいでの迷惑をかけてみんなの機嫌を損ねるから、出来ればやりたくない。陸上ならとりあえず一人で走っていれば、迷惑をかけることはないから、みんなの目を気にする必要はなかった

3時間目は世界史。

千春は歴史は好きだった。

ゲーム、アニメ好きの千春にとっては、現実に起きた歴史が、漫画や小説のストーリーみたいで面白かった。なのだが、2時間目が体育だつたせいなのか、何人かの生徒は目が虚ろになつて今にも眠つてしまいそうだ。

世界史の先生も注意する人ではないようなので、ますます生徒の急け心が助長されていた。

「こんなに面白いのになあ、でも現実には魔法もモンスターも超能力もないんだよね〜」

千春は小声でつぶやいた。

すぐにはつとなり、誰かに聞こえてしまつただろうか、千春はあせりを感じてしまつたが、誰にも聞こえた様子がなさそうなのでほつとした。ついつい、気が緩むと、心の中の言葉を口走つてしまつのだ。いけないいけない、気をつけないと、千春は心の中で気を引き締めなおした

お昼になり、石原とお弁当を食べていると。

「ねえ神奈、先週の中間テストのことなんだけじれ

「ん? なあに?」

「テスト範囲外の所が出ていなかつた?」

「え? 何の教科で?」

「数学」

「ああ、言われてみると、聞いていなかったところが出ていたかも」「でしょ、これつて先生のミスだよね、訴えたら、点数修正してくれないかな?」

「そんなんに、点数悪かつたの?」

「親に怒られた」

「そりなんだ」

本当に当たりさわりのない会話だな、千春はそう思った。

アニメとかでは友達同士は下の名前で呼び合いつことが多いのに、現実では下の名前で呼び合いつことってあんまりないよね。そもそも、さんづけで呼ばなくなつたのも2学期からだし。夏休み中もほとんどあうこともなかつた。

私と石原つて友達なのかな？

千春は石原のことを友達だと思っている。だが、決して、親友ではないとも思つていた。だから、たとえ、石原が千春から離れていつてしまつたとしても、千春はかまわないと思つていた。

もづ、下の名前で呼び合えるよつた、大切な親友は必要ないのだ。

「神奈」

「えつ、なに」

「どうしたの？ぼーっとして」

「えつあつごめん、なんでもないよ」

「本当に大丈夫？なんだか最近ぼーっとしていることが多いよ」

「ありがとう、でも、本當になんでもないから」

「ここで、本当の自分の心境をいえたら、どんなに楽なんだろう。そうおもう、だけど、言えない。

世の中、本当に自分の本音で話せる、友人に出会える人なんているのだろうか？本当に心を許せる人に出会える人なんているのだろうか？

結局みんな、同じ場所にいる、そこそこ気の合つ、友人になれそうな人を見つけ出して、共通の話題を探し、その枠内だけで会話をして満足しているふりをしているだけではないのかな？

そもそも、目の前にいる石原だつて、なんらかの隠し事はあるとおもうのだ。私にも言えない、もしかしたら、家族にだつて言えない隠し事があるのかもしれない。私にもあるよつに、きっと石原にも本当に言いたいことがあるのだろう。でも、それを言つてしまつ

と今の関係が崩れてしまうのではないか？その恐怖心が、心にブレーキをかけてしまうのだろう。千春はそう考えていた。

5 時間目 英語

この教科で千春は、先生に当てられたままだった。

普段からそれなりに真面目にやっている、千春にとつては、内容自体は問題ないのだが、クラスメイトの注目を浴びてしまうことが嫌だった。緊張してしまい、しじるもじるになってしまった。ああ、頭の中が真っ白だ。

「先生、もう、許してあげてください」

不意にどこからか、声が上がった。同じクラスの黒田君だった。

クラス中にどつと笑いが流れる。

「そうだな、神奈、もう座りなさい、しつかりと勉強しておくよ！」

先生がため息交じりで答えてきた。

別にわからないわけではないのに、千春は心でつぶやいた。顔から火が出るかと思うくらい、恥ずかしい思いで席に座った。

千春は注目されるのが嫌いだった。

もともと、おとなしく、目立たない性格だったので、じついつたことには慣れてないのだ。しかし、クラスの男子の中にはリーダーシップをとりたがるような、黒田君のような目立ちたがりものいる。どうしてそんなにも目立とうとすることが出来るのだろうと、千春はいつも不思議だった。目立ちたがりの黒田君はいつもでも楽しそうだ。うわさではバンドもやっているらしい。

その人には悩みとかはないのかな？なんだか、少しだけ、うらやましいな、まあ、私には縁のない世界だけ。そう考えながら千春はため息をついた。

6時間目も終わり、千春は帰宅の準備をしていると、珍しく石原が声をかけてきた。

「一緒に帰ろう」

「あれ？、部活はいいの？」

石原は「道部員だ。

「うん、今日はいいや、それよりも、神奈が最近元気がないのが気になつてさ」

まつたく、私にはもつたいないくらい、よく出来た友達だな。千春はそう思つた。でも、元気がないのは本当は最近じゃないよ。あの時からずっとなんだ。この季節になると、そのことを思い出してしまうから、でも、そのことは絶対に言えない。言わないと決めているから、私はもう 終わっている人間だなんてことは。

「ごめんね、石原、千春は心の中で謝罪した。

「それで、どうして最近元気がないの？」

帰り道に一緒に歩いていると、石原が聞いてきた。

「どうやって応えよう？ 何かそれっぽい答えを言つてしまかしかない。千春は覚悟を決めた。

「うん、本当にたいしたことじやないんだけど」

出来るだけゆっくりと余話をしながら、頭の中は、それっぽい答えを考えるために高速回転だ。不意に5時間田のことが頭をよぎる。「なんだか私つて、クラスで浮いているなつて思つて」

「はあつ？」

「うん、私つておとなしさすぎて、本当はわかつてこる答えでも、まともに返すことが出来ないなつて思つて、ほら、今日の英語の授業の時とか」

石原が隣で聞いている。

「私のこの性格が嫌いでさ」

そして、石原が言葉を返してきた。

「なんだ、そんなことで悩んでいたの」
ちょっと意外な言葉が返ってきた。

「そりや、私は神奈の性格をよくわかっているつもりだよ、5時間田の時だつて、あつ当てられちゃつたつて思つたもの、うまく応え

られるかな～って思つたけど、やつぱりダメだつたわね
「そりゃ、朝でも匂いはんのときでも、あれだけぼーっとしていり
ややうなるわつて思つたもの」

「つまり私が言つたにのは、あんた考えすぎなの。考えすぎるとから、
どんどんと悪いほつに落ちていつてゐるじやない」

「頭の中だけで、シミコロートばかりしていないで、少し行動につ
つしてみなさい」

石原が早口でまくし立てる。

「いつ行動に？」

千春は困惑していだ

「そつ、行動に移すの、あんた、あのあと黒田君にお礼は言つたの
？」

「こつ言つてないけど」

もじもじしながら千春は応える。

「せひ、黒田君は神奈を助けてくれたのよ、お礼べつて言つてしま
べきだと思わない？」

「そりや、男子に声をかけるのは勇氣がこる」とだけ、そこから、
自分を変える一歩になると思わないの？」

「つ、うん」

「せひ、明日お礼を言つてみなさい、あれこれ考えていいで、ま
ずは行動してみなさい。石を投げなこと水面に波紋は立たないのよ」

「ええっ！」

「やつぱり怖氣づいてる、せひ、そんな地味な格好をしているから、
中身まで怖がりになつてしまつのよ。もう少し自己主張をしてみな
さい」

「眼鏡も取つてみなさい、ほら、そんな地味な髪型もしてないで髪
を結んだりとかしてみなさい」

「あんたもつたいないじやない、結構可愛いのに、そんな地味な格
好をしてこるからクラスの男子は誰も見向きもしないのよ
「恥ずかしいよ」

千春は顔が真っ赤だ。

「すぐに変わりなさいとは言わないわ、でも、せめて明日黒田君にお礼ぐらいは言いなさい。私も後ろでついていてあげるから」

「つまくいけば、黒田君と仲良くなれるかもしれないわよ。ほら、黒田君って結構女子に人気があるのよ。」

「もしも、仲良くなれて、うまく行つたら最高じゃない。あんたも彼氏が出来れば、変わると思うわよ。ほら、女って恋をすると美しくなるっていうじゃないの。」

自分だけ付き合つたことないくせに、千春は心中で軽く毒づいた。

「あっ、もうこんなところまで来てた。私行くね。じゃあね、神奈。」

「好き放題喋りまくつて、石原は自宅のほうへ駆けていった。

千春は一人になり、とぼとぼと歩いていた。頭の中は先ほどの石原の言葉で一杯だ。

「彼氏、か。」

「石原には悪いけど、私には彼氏なんて必要ないなあ。」

ついつい千春は独り言をつぶやいていた
「私にはもう、幸せなんて、いらないから」
空にうつる夕焼けはどこまでも赤かった。

「なんだかなあー」

千春は思いつきりため息をついた。

「いつたいいつからこうなつてしまつたんだろ？」「いつからなんて、わかりきついている。そう、あの時からだ。私の人生が終わつた、あの時

「瑞希」

千春は無意識にその名前を呼んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7315m/>

聖女物語～～～世界編～～～

2010年10月8日13時32分発行